

子供時代から老後まで

死ぬまで、映画館とつむぐ

映画や舞台で活躍する片桐はいりさんは、自著の冒頭で、「みずからの出自を問われたら、『映画館の出身です！』と胸張ってこたえたい」と語るほどの映画館好き。

個性派女優の心を驚つかみにして離さない映画館の魅力とは――？

俳優

片桐はいり

●かたぎり・はいり 1963年東京生まれ。映画、舞台、CM、テレビなどで活躍。『もぎりよ今夜も有難う』（キネマ旬報社）、『わたしのマトカ』『グアテマラの弟』（ともに幻冬舎）などの著作もある。

映画館が、いちばん楽しい！

映画館好きは、子供のころからです。子供時代があまり楽しくなかったんです。集団行動は苦手だし、同年代の子とまったく話が合わない。映画館で映画を観ているときに、いちばん楽しい時間でした。

中学生のときに観た『ジョーズ』

には、度肝を抜かれました。人がサメに食べられてしまうという恐怖で、しばらくのあいだ、水が恐くなったほどです。映画を観るときはいつも、その世界に引きずり込まれていたんです。舞台が外国なら自分も外国に飛んでいましたし、観終えたあとに、勝手に話の続きを考えたりもしました。そうやってどんどん、映画にハマっていったんですね。

私が生まれたのは東京オリンピックの前年で、映画の全盛期ではありませんでしたが、地元・大森の近所の蒲田は松竹撮影所ゆかりの地ですし、映画館もわりとありました。でも、実際に観に行ったのは、日比谷の映画街や、丸の内、銀座界隈の映画館、渋谷の東急文化会館なんかですね。川崎や横浜に足を延ばすこともありました。少ないお小遣いをや

りくりしながら、それでもまめに出演していました。

大学生になったら映画館でアルバイトをすると決めていたんです。とにかくいつでも映画を観られる環境で生活したかった。当時は映画を「観たい」だけで、俳優になつて映画に出ようという発想は、まるっきりなかったんですが、ひょんなことから舞台に立つことになりました。

きっかけは大学の映研です。サークルは普通、新入生の勧誘には躍起のほうですが、映研に断られた。映研がちょうど八ミリ映画を撮ろうとしていると聞いて、「私も出られるんですか？」と尋ねたら、「あなた顔はアップがある映画より、遠目で見られる舞台向きだと思っから、演劇部に行ったほうがいいよ」と言われてしまった。

そんなものかと、演劇部に行ったら、公演直前なのに女性キャストが一人足りず、「入部しなくてもいいから、あなた、この役だけやってくれ」と懇願されました。子供のころから表現することは好きだったので、演劇の舞台もさぞ楽しいだろうと引き受けたのですが……、本当にまったくぜんぜん楽しくない(笑)。以降、「こんなはずはない」と思っ、もう三十年くらい役者を続けているのですが、いまだにそんなに楽しくないですね(笑)。

映画館は「街のソムニ」

アルバイト先の「銀座文化」では、もぎりをしたり、受付に立ったりしていました。ごひいきの映画がかかる、ちよくちよくスクリーンをのぞきに行きました。毎日とにかく



片桐はいりさん出演情報 カンパニーデラシネラ『カルメン』：神戸アートビレッジセンター・2013年1月24日(木)～27日(日)、カンパニーデラシネラ『異邦人』：世田谷パブリックシアター・2013年2月公演予定。詳細は、両作の演出家であり、カンパニーデラシネラの主催者でもある小野寺修二さんのオフィシャルサイトまで。

<http://www.onoderan.jp/website/>